野鳥と保護

斎藤春雄

北海道には三〇〇種をはるかに越える野鳥がすんでいるが、地域開発が進むにつれてその生息、繁殖地が少なくなり、どこもすみにくい様相を呈してきている。このような状態のなかで野鳥を保護することは、なかなかむつかしい。また野鳥は、われわれの精神、経済、生活の面にはかり知れぬ貢献をあたえている反面、時期と土地によってはこれと反対の立場に置かれている種類も少なくないので、これらをどう考え、どう対処していくかということも大きな問題となっている。

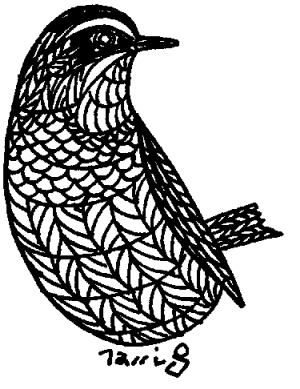
いずれにせよ、人間の社会生活のなかにあって、野鳥はどうあるべきか、ということを明確にしない限り、野鳥に対する人々の観念は定まるものでなく、一般に対して野鳥の生態を明らかにし、これにもとづいて、誰にでもなっとくのいく保護を行なうようにしなければ、決して人々はついてこないであろう。

日本とよく似た環境にあって、野鳥保護が行き届いているようにみえる欧州各国の実状をよく調べてみると、これらに対するじゅうぶんな配慮が見られ、彼らにとっては野鳥は人間のために存在しているのだ、というはっきりした観念をそれぞれの立場において認識しており、それでこそ保護にあたっては、徹底した方法をとることができるのである。

しかし、いずれにしても保護が基調となるのは、野鳥に対する一般の知識と理解にあることは、いうまでもないことで、これらの国々のほとんどの家に、野鳥のガイドブックが常備されていることでもその一端がうかがわれる。したがって、この種の本の発行部数は非常に多く、その価格もきわめて安い。

わが国の場合は、この保護の基底となるべき野鳥に対する関心と理解が、ほとんど絶無にひとしい時代もあったが、近年、それがかなりゆきわたってきたことはよろこばしい。しかし、それが本当の保護思想の普及にいたるまでは、これからの努力にまつところが多い。とにかく現在もっとも必要なことは、ひとりでも多くの人が、野鳥の状態をよく知り、それと人間との関連性を理解することであろう。

さてこの機会に、写真欄に登載されている野鳥について簡単な解説を記したい。



タンチョウ

タンチョウについてはいまでは誰でもよく知っているが、大正十二年に釧路湿原にまだ残存していることが判ったときは、十数羽にすぎず、まさに絶滅一歩前の状態にあった。しかし、それ以後の関係者や地元の人達の保護により、現在は二〇〇羽に増え、しかも秋から冬にかけて市街地近く現われ、餌をとるありさまを目のあたりに見ることのできるようになったのは、当時としては想像もおよばぬことであった。

同じように絶滅にひんしているアメリカシロヅルは、カナダとアメリカ両国政府の莫大な費用と労力により、二十数羽をその二倍まで増し、人工養殖施設もできて保護は軌道にのっている。また、有名な佐渡のトキも、現在十一羽かろうじて保ち、数千万円をかけた人工飼育場まで設けて、絶滅の防止に全力があげられているが、このような鳥類に対する保護の増殖は、想像を越えた苦心がはらわれているのである。

幸いタンチョウの保護増殖は成功したが、これは日本の伝統につらなる鳥としての強味を持っていたとはいえ、とにかく、四十六年間にわたる長い年月のたゆまぬ保護の手により、ようやくこの効果をあげることができたのである。

歩行も困難な大湿原の奥ふかく、ひっそりと身をかくし、冬には餌が不足して死ぬものが多かった当時のタンチョウを助けるためには、まず彼女らをその秘境から安心して脱出できることを教え、次に部落に近くさそい人間の姿を見せ、次第に畑に落ちている穀物を拾わせるようにして、最後に給餌のトウモロコシを食べさせ得たのである。これは気長な苦しい仕事ではあったが、そのためにもっとも必要だったことは、地元のすべての人々の胸にタンチョウを理解し、これを護ろうという気持ちをおこさせることであり、これが成功したのでその保護施策も軌道に乗ったのであった。

タンチョウの保護はもちろん重要なことであるが、これと同時に、どのように警戒心の強い鳥でもしんぼう強く護ってやれば、必ず人間に近づいてともに暮すようになる、ということをタンチョウによって実証し得たことは、今後の野鳥保護に大きなよい影響をあたえてくれることと思っている。

オジロワシ

タンチョウは増えてきたとはいえ、まだその巣は多くない。しかし、これよりもっと少ない巣を持つ鳥はオジロワシであろう。知床半島と、道東の山地と、オホーツク沿岸に天塩地方の巣を合わせても、現在判っているのは一〇数個程度にすぎない。北海道の鳥類の巣としては、もっとも少ないものといえる。しかし、このオジロワシの姿は冬の道内ではよく見られている。このワシは千島、カムチャッカなどで繁殖し、秋の終わりには北海道および本州に渡って越冬するので、道内の海岸地方に多く現われているが、洞爺湖、支笏湖岸でも毎年その姿を現わし、とまる木もきまっている。日高、十勝の海岸にも多く、冬空を悠々と舞う姿が見られる。

本年二月十四日根室市より風蓮湖に沿う国道筋で三羽のオジロワシを見たが、同じ日にオオハクチョウの群がる尾岱沼で氷の上にたたずむ一羽も目にはいった。渡りの季節には道東でもっとも多く見られ、知床半島の崖と流氷の上に五十数羽の群が休んでいるのを見た人があったが、この辺りが渡りの道路にあたっているのであろう。

日本にすむワシは三種類あるが、イヌワシは主に本州の山地で見られ、その数は少ない。オオワシはカムチャッカ半島などで繁殖し、オジロワシ同様のコースにより、北海道、本州で越冬するが、成鳥はオジロワシと同様に尾羽が白いが小雨覆という羽が白いので、すぐ判別することができる。この鳥の数はオジロワシよりは少ないが、冬の道内でかなり見ることができる。

ワシのように大型の鳥は、開発が進めばすみにくくなる度合が特に強いので、現在欧米でも非常に減少し、大切な鳥とされている。道内で越冬したり、通過していくワシを保護することはもちろん必要であるが、僅か残されているオジロワシの貴重な巣を護ることに全力をあげなければならない。

オオハクチョウ

北海道の鳥としてタンチョウとともに知られているのはオオハクチョウであるが、これはシベリア地方でかなり広い区域で繁殖したものが、秋になるとまだ灰色をしているが一人前の大きさになった幼鳥をつれて北海道に渡来し、主に根室の風蓮湖、尾岱沼を中心として越冬する。冬のはじめには風蓮湖に多く、その数は一万二千羽を越える。湖中に生えているアマモなどの水草を食べているが、湖が凍りはじめると、大部分は附近の尾岱沼に移って行く。渡りの途中、宗谷地方の湖沼や網走のトウフツ湖あたりに羽を休める群もあり、また厚岸や根釧原野にある沼や、不凍河川に分散群せいするものも多い。さらにその一部は遠く本州まで羽をのばし、青森県をはじめ、いくつかの県に達するものもあるが、春には北海道を通り北方に帰って行く。

このオオハクチョウの群には標準和名をハクチョウという種類が交っているが、これはやや体が小さく、くちばしの黄色部が鼻孔の後方までおよんでいるので判別できる。なお、皇居のお堀に浮かんでいるコブハクチョウは欧州で見られる別の種類で、いまでは飼鳥として各地で養なわれている。

オオハクチョウの純白な気品高き姿はまことに美しく、鳥の女王と呼ばれるにふさ

わしいが、さらにその大群が風蓮湖や尾岱沼の湖上を圧して群遊するさまは、すばらしい眺めである。この鳥の野鳥としての基本的な習性をそこなうことなく、しかも、北海道の生息環境にもっともふさわしい保護の方法を確立することが急務である。

アオサギ

本州を旅行するとよく白サギが田園の中に立っているが、これらの種類は北海道ではあまり見られなく、この地方に多いのは灰色の大きなアオサギである。サギの種類は群棲して木の上に大きな巣をつくるが、道内には、アオサギのコロニーが多い。札幌市附近では野幌森林公園の中や、苫小牧市にあるものが知られており、目につきやすい場所としては浦幌町の鉄道線路沿いにも見られる。さらに、釧路、網走その他の地方にも繁殖地がつくられている。

アオサギは春のはじめに南方から渡ってきて巣をつくり、ヒナをそだてるが、営巣地の林や餌の小魚などをとる湿地が少なくなってきたので、ほかの鳥と同様にこの北海道でも次第に住みにくくなってきている。このように群棲繁殖する習性の鳥は、餌をとる場所がよほど広くないと、その群れの食物を確保することはむつかしい。その意味で、周囲が発展途上にある個所は採餌個所に注意しなければならない。営巣地ばかり護っても、本当の保護とはならぬ場合も多いのである。

海鳥

群棲繁殖している鳥でも、このような心配のないのは海鳥で、彼女らは巣の周囲に広い海をめぐらし、ふんだんに餌となる小魚を持っている。オロロン鳥といわれているウミガラスで有名な天売島をはじめ、松前小島、根室地方のユルリ、モユルリ島なども、ここに集まる海鳥類にとって餌の不自由はない。こういう場所は、できるだけ人間が近よらず、安心して巣を営むことのできるようにしてやるのが最高の保護なのである。

これらの島々には、いろいろな海鳥が集まっているが、ことにモユルリ島は北方鳥類の宝庫で、小さな島全体が海鳥のアパートとなっており、じつに貴重な島といえる。ここでよく知られているのは、大きく赤いくちばしを持つエトピリカで、この島は主に千島以北の孤島の崖に穴を掘って巣をつくっているが、北海道では厚岸港の大黒島と、この島で見ることのできる珍らしい鳥である。

珍らしいといえば、春秋に北海道を通過するマガン、ヒシクイなどのガンの大群の中に、ときどきカリガネがはいってくることがあるが、これはマガンによく似た小型のガンである。カリガネという言葉は、古い時代にはガンの総称として使われていたが、現在ではこの鳥類の標準和名となった。

また、迷鳥として偶然北海道に現われる鳥の中にも、きわめて珍らしいものが多い。アジアの北部で繁殖しているクロヅルもそれで、たまたま千歳市附近でたおれていたものが保護され、札幌市藤の沢の小鳥の村で飼われていた。また、ツルの迷鳥としては昨年十月にアネハヅルが石狩町で一羽見られているが、毎年秋にアジア北部から山口県、鹿児島県に渡来するナベヅル、マナヅルの類も、いままで北海道で見られたことがある。このうちのナベヅルは、秋季に道内を毎年かなりの群が通過しているという話しもあるので、調査に行ったが短い期間なので確認できなかったが、いずれくわしく調べてみたいと思っている。

北海道にすむ鳥の中には、専門的にみても興味の深い種類が多いが、われわれが手近かなところで見ることのできる鳥の中にも、いかにも北国の大自然にふさわしい鳥が少なくない。たとえば、大きな半月形の羽を開いて、悠々と飛翔するハリオアマツバメなどは、それが高山のお花畑の上、大湿原の空、あるいは都市の上空においてさえも、北国の空気にぴったり合ったすがすがしさを満喫させてくれる。

また、平野の灌木や牧柵の上にとまって、すき透るような声でさえづるシマアオジやノビタキなども、どこにでもいる鳥ではあるが、その姿といい、鳴声といい、いかにも北海道の自然にとけこんだ美しさを持っている。

さらに、紅葉の野や山を渡るマヒワの群は秋の盛りを知らせ、雪の消えはじめるとともに、市街地近くまで現われるレンジャク類の美しい羽色は、春の来たるをおもわせてくれる。こうして、四季のうつり変わりを敏感に知らせてくれるのも、われわれの周囲にいる鳥である。

北海道は緯度が高く、鳥類の繁殖に適した条件をそなえているので、多くの種類が渡ってきて巣をつくる。また、本州では高地でなければ繁殖しない鳥が、道内では平地で見られることも多いので、鳥類の観察には絶好の土地といえようが、同時に、その保護についても、北海道は大きな責任を負わされているといってよいだろう。

（道文化財専門委員）